

稲盛経営哲学とロータリーの職業奉仕

ロータリーの哲学は、職業奉仕に限れば、京セラの稲盛和夫の経営哲学に多くの共通点が見出せます。稲盛和夫は、逝去された2022年、自身の考えを纏めた「経営12ヶ条」という本を刊行しました。稲盛の経営哲学は、ロータリアンであった松下幸之助の流れを汲み、経営の実践の中で生み出され、その根底には石田梅岩の商道が受け継がれています。

「経営12ヶ条」では、思いやりとは利他の心と言い切り、自分の利益だけを考えるのではなく犠牲を伴っても相手に尽くす心であると述べ、弱肉強食のビジネス社会に於いても思いやりが大切であり、情けは人のためならずとある様にその恩恵は必ず自分に返って来ると唱えます。これは、ロータリーの「He profits most who serves best」と同じ考えです。稲盛は、京セラの成功は利害より相手を思いやる心から生まれたと明言し、相手を思いやる利他の行為は、一見すると自分が損をしている様でも長いスパンでは素晴らしい成果を齎すことを理解すべきと説いています。

稲盛はまた、「人間は誰しも利己と利他という二面性を持っている。利己は本能であり、一方、利他とは、犠牲を払っても相手を愛する事や他人を利する人間の本性」と述べ、そして、「利己と利他の大きさにより人間性が決まるので、利他の肥大化が大事で、利己より利他の方が大きくあるべき」と説きます。

そして、「利他の肥大化には学ぶしかない」と学びの大切さを説き、利己は本能なので学ぶ必要はないが、利他は常に意識して学ぶしか成長させられず、利他の心の成長こそが人間性を高め、心を高めることになる」と説きます。

また、稲盛は簡単に助ける等の小善は大悪に似ており、大きな善は一見、非情に見えるが、目先の同情心ではなく、本当に相手の為になろうとする大きな愛があると述べています。

稲盛は若い頃、石田梅岩の商人道の「真の商売は、先も立ち、我も立つことを思うなり」、即ち、「相手も儲かり、自分も儲かるということが誠の商売であり、自分だけが儲かれば良いというのではない」という言葉に触れ、後の人生に役立てたと述懐しています。

最後に、ロータリーの鑑とも思える稲盛の言葉を紹介したいと思います。「経営者は世間では拝金主義の様に言われるが、実際は自ら経営に尽力することで従業員と家族を守り抜いていることが多い。これは素晴らしい利他行です。会社が社員を搾取するのではなく社員の協力により繁栄することが、社員の物心両面の幸福となります。それにより、株主も幸福になるので、社員に喜んで貰えるように努めることこそが経営です。」